

## 【南九州地区納税貯蓄組合連合会会長賞】

### 命を救った税

鹿児島市立吉野中学校

二年 川島 理乃

私には弟がいる。三歳年が離れていてもやんちゃだが思いやりのある優しい弟だ。そんな弟がまだ一歳の頃。母はいつものように外で洗濯物を干していた。母の行動を観察することが大好きだった弟は、いつものように窓のそばに座り、母を見ていた。いつもと変わらない何気ない日常。しかし、一瞬で穏やかな時間が一変した。

弟が窓に寄りかかろうとしたとき、弟は一階のテラスから倒れ落ちた。窓が開いていたのだ。気付いた母と父は、すぐに弟を抱き上げた。母は保健士をしている姉に連絡をした。救急車を呼んだほうがいいと言われ、母は一一九番通報し、救急車を要請した。その間、私たちは弟の名前を何回も何回も呼んだ。弟は何の反応も示さなかった。当時、私は、パニック状態だった。

十分ほどで救急車が到着した。母は弟に同行し、私は父と病院へ向かった。幸い、弟は大きなけがもなく、たくさんの検査をしたが、特に異常もなく、その日のうちに家に帰ることができた。

しばらく経ち、私がこのことを思い出したとき、私はふと、救急車を利用していくらしただろうかと疑問に思った。おそらく相当なお金を支払ったのだと思った。しかし、救急車は費用が要らないのだと知った。なぜお金が要らないのか。

調べてみると、日本では、救急車の運用は行政サービスのひとつとされており、救急隊の人件費や救急車のガソリン代、救急車内に設置されている医療機器や物品の費用は全て自治体の税金が使われていて、無料だということだった。

世界の救急車についても調べてみた。完全に救急車の発進料が無料な国は、日本と香港だけ、ということが分かった。一方、その他の国は、発進料がかかっていて、オーストラリアは最高で十六万円、ドイツでは二万円から七万円かかる、ということを知った。日本も救急車が無料ではなかったら、一回発進するごとに四万五千円もかかると知り、とても驚いた。それと同時に、あるとき弟が助かったのは、税のおかげでもあるのだと強く思った。

私の隣で楽しそうにゲームをしている弟。あの救急車が来てくれていなかったら、私たち家族の幸せな日常はなかったかもしれない。心から感謝している。

今、日本では、安易に救急車を呼ぶことが問題になっており、救急車の一部有償化に向けて検討されているらしい。どうなっていくのだろうか。

大人になると、今よりもたくさんの税金を納めることになる。私の納めた税金が、私にとって、また、私が知らない誰かにとって大切な存在の人の命を守る。その思いを決して忘れずに税金を納めていきたいと思う。